

9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8



タフ  
万里小路  
淺茅生ふとのふ社  
帝詔ウ  
ムニ雪丸

閑田耕筆

ドリ ちゆく人乃りしれるを ぬのうえりすと  
を得るゝ、どもくちくと えぢよしは  
小き付至るらばさかづら於此そん義務じ  
ゆけりてえせよと けりへん  
あれ不以つれまほり、はきと後不とも  
さひえねハキ難祖の教とて おもむりひて天地  
人あ事やまからてうれ 古乃中より  
足歩るまにゆひふ又歩くに不せど  
まわるよのび題小石のれありひ出紙  
ことみばついくにあまむと うる人乃  
きあふ、まはきんと うれりやめのうら色



老來幾部著書成祇遣  
屏居遂嬾情最是紙田  
閑不得長遭筆未四時

耕

此予卜居閑田廬之初林泉院六如尊者見惠  
之作真知予平生者也及垂此書通取之以右  
馬故揭三卷首云己未冬日 萬達齋

閑田耕筆卷之一

閑田廬萬達齋著

天地部

男体贊規直樹枝

○長庚星と考へた大臣都とせられたる御子和名が  
由来としてゐる。二子の小渭もふくらみやさうう  
此時のちの詩小雅大東篇西有長庚の下れ毛傳に  
は脱入詔歌星為長庚庚續也トナリトアラヒトアリトハ  
はくの主すト下れ一がまとひて濁り、どもくと手此考  
を以てほ貝余義の日本釋名を以てタの日につけ  
てやればく解せん。もと曰く主とほほの事ハシム也  
万葉第二ノハク多の事トゾトシム也と云ふ事ハ

ひらまほは清のまへより廢キテ故不昌正をつぶ  
○七夕に牛女更今の說ひあり「一ノ芳より前後て  
百葉草す」とすもとくもめめ奇乃人のまうべをひ  
奥の事の「ふき」よりみじかく或人星れ味背り  
仍とまよ作づる「一の寺」とよす或はよきせよせよ  
「ひる」の寺三日御事とさむらひり「一ノ寺」  
おうアラスモリモハ古人の例ふ有よ「一ノ寺」  
にあすといぢりあらは「一ノ寺」は仁廟先生の寺  
とナリけた間アラシタガシマシテたれりとくよ  
ひうたぬとエアヒツルトヨガアリた是ハ宗儒の說に  
二字吏倉の俗統の天との列宿を汚穢せざまくや  
「すに」のやと經儒の本韻とぞ「例きば廢義」

ひより吉は「もよもよは宗儒五家の廢義」  
考よりけじ牛れ神「一長幼のれと失くぞう」  
「ひよひよ」

○上弦の南方を下弦の北方「一鳥くわくわく

アトヤレドモ画キヨムモギヨム

○牛の初毛浦柳の質す、秋次と畏つてぬり月と  
素もつて之月にあひて「一サモアリ」もと云ひれ  
「初」一毛浦柳の月をあひゆびきれ牛の質す  
此は一人人赤きる褐ちまうゆ月色如霜不寒肌  
月光水不沾衣。一年後賽<sup>セイ</sup>中元節政是初<sup>ヨリ</sup>祭未  
發時人所ひひたまのと見とせまて御<sup>ミ</sup>らるに

あへりてすかひをまわす月とてする四月  
の半より是年の齋もまたひにあへりてす  
やと署とくじの書いたるべ  
○齋ふ兄弟とよしとせた惠方とちひゑと  
方とひのうやあらば甲丙庚酉八方にさ  
はだ兄弟の免し甲をすて兄弟とすとせくま  
○甲巳亥へ甲方宣印同  
乙庚寅へ庚方申酉同  
丙辛未へ丙方己午同  
丁壬戌へ壬方亥子同  
戊癸亥へ丙方卯とねん小酉亥巳辰  
○せよりしよりて齋ふがくとてすれど  
き人の處まに移りとてアヘセラシリ  
うちふとれとくの本をくわめくり年つゝたり  
御くにちう字と有卦云卦をくわめくうの生の  
惠方へとくはくと有暇無暇とてアヘ般若  
に貢窮と能八肩暇とて基なりほよ實を時  
立とて是よりゆくとて御芳老禅の活立り  
牛の天子とまにゆくとて阿波くわりと  
びさりてとくをやくとねば止ととゆ  
終不入深とすておふきとおみ草にまく  
それとえよりてらうとくとくとくとく

○唐山の開港もさへまに至りて出でて人間  
制度はそれが本邦の統治行政より、ふ偽りあつた  
アリ多より、いがれども必ず被國は、紀元もよびこ  
ナリ也天皇も通じて、御に是事

○即ち人自持て中華とも華焉とせりて、かくして  
その人それふ偽りて、かくして天ひられ、庶民を了  
らうに、かくして、せん華を奉称して、かくして、かくして  
まますわが、はるべ水戸の太日下丈に、あも中華のよす  
まに、かくして、かくして、かくして、かくして、かくして  
まに、かくして、かくして、かくして、かくして、かくして  
○本邦のは、貨直<sup>シカヨリ</sup>、又飾りよが、本邦よりひづり  
善も悪も進む、小走<sup>スニ</sup>、て有るあるうづりとけと貨

直ふよりて天皇と作く、て實に天のどく、民のうえ  
ハラ雄略紀小権將<sup>ヒサシキ</sup>、者モ、史第表<sup>フジオトキニ</sup>、がゆと、あたによふ歎  
とかりて、ひそりふ穀<sup>ヒソリ</sup>、と國あ情深君<sup>シテ</sup>、義物忠誠<sup>シテ</sup>、白日節  
冠<sup>カハタ</sup>、去<sup>カハタ</sup>廢<sup>カハタ</sup>、アリ帰<sup>カハタ</sup>、アリまと穀<sup>ヒソリ</sup>、と節<sup>シテ</sup>、志<sup>シテ</sup>、紀者  
の御<sup>カハタ</sup>、とくとく國<sup>カハタ</sup>の御<sup>カハタ</sup>、

○ナマリ、威權藤氏<sup>ヒラタシ</sup>、拂<sup>ハシメ</sup>、政令<sup>シス</sup>、もよに、出<sup>ハシメ</sup>、やで  
此權半<sup>ヒラタシ</sup>、ふうづり源二位<sup>ヒラタシ</sup>、もよに、出<sup>ハシメ</sup>、やで、追補<sup>シラツブ</sup>、使<sup>シテ</sup>、の任<sup>シテ</sup>、とすて  
四浦派<sup>シラタシ</sup>、またかく、しらま<sup>シテ</sup>、もよに、出<sup>ハシメ</sup>、やで、くに、及<sup>ハシメ</sup>、付  
統連<sup>シラタシ</sup>、拂<sup>ハシメ</sup>、出<sup>ハシメ</sup>、ゆく、おと、君<sup>シテ</sup>、のひ、かく、國<sup>カハタ</sup>、に  
す<sup>ハシメ</sup>、や<sup>ハシメ</sup>、と、君<sup>シテ</sup>、の國<sup>カハタ</sup>、と、くと、す<sup>ハシメ</sup>、よ<sup>ハシメ</sup>、  
幸<sup>ハシメ</sup>、と、かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、かく、

みもぢくもだ被ふにたゞ身支服とゆる涼義論の後を以て  
○本邦ノ人を殺モシトは行方不明の者も罪あるも  
死一もとなくして死刑も處でる涼義論半民とはうが  
内府とはいわば刑罰本首の刑よりこそ安住が撰りて  
刑罰もまづひそりけりも院宣として追討もこゝも  
更に刑部とよもゆく其れ刑部の官枕のをぞう達  
の中廢置さりえん元保元平治の奉公と身水之内に  
本邦の所と云ける。况北条氏儀を擁て三帝  
乃遠方に坐すひ天と作を志と擧る隨へ先公達也不  
察よりと云へ

○被國風ハ又餘ありてまた之歴史より存焉。事  
事體とあやまつてからずニヤ力量もそれふらず

弱ふる今もと古に身を棄てぬは不人相撲にて  
きに勇氣を發揮と曰ふ。又もと幼無性をなうやの至人乃  
歎滅絶りたれどもみれば國風はよろしくかどり  
んを一二とそと人と罪する。事體にせむとまふされ  
もあらざれた罪すても人を刑罰す。やもすれハ三族より解  
放すてかまば頼歴史小手一書の内青寡とくに極刑もり是と  
復連すより生れ肉をこぎて骨をふし骨小ぶり數  
少すまへて國風もあらざりと考へてト音にあひて  
吾那までへかつて生れると人を考へて近世もありて此  
一皮衣に生れとて脚と手と豐たるれをりものも凡  
のへ人數を多くなりてそれが改やう歎ふもとひもと郭  
子の非情の事か。似たゞくもとすば高すて生

牛と割合に西代のまわりをまわる者皆人  
の活きてゐるが故にあつてかねて猪を殺す事  
奉西洋ふる事が多し。けじふるつてせば人のどうなり  
へりとよどみゆ此の廣門通までまにをかく、唐人會  
追捕ふ小を送りまらる。の前かまく牛ひ放ふよ送り  
男でハ猪をも様にて舟ふつて酒ふほんとあづく漕出で  
は焼物とくともともに家構のよ驚の難をとす。載  
りき。あとも共ふ焼物の被まく烟よ惣ひく。しがる。  
無ひと二り人の追捕はあとうら翁てつひる御不  
あらぬとひありなれども廻すに牛と割て間じ  
ふくろにひれまふ用ひ也。新宣王鄭子産等牛と  
駕はよ身ひど生臭をかてられどひとも。惣隱乃は

物あり候

○附引トソマヘイシムトビバ唐山ノ國ニ乃  
風を論どうどく云胡ふても大の人の氣象あつて優  
に小の人の過よりあひを教む士民矯泰よ勢又  
をあれ畏縮モ阿漢の人ハ微慢ふゆけれ人ハ懶怠す  
市井の人ハ過者多く筋骨ニ辟端の人が脣直ナテ偏置  
ありれど曰里に為義擇不處に焉得知。是故ふくわ  
事とてつてのゆべ端堵徵ふ里のまと居のとくならじ。す  
つすもかにすれども昨年付に江戸に考課を立候漢  
書九十九西域傳に烏弋山離國以下曰安息長老傳聞。候

○西王母の仙子て漢武帝ふまえに漢書を事列  
松竹草に立そく人皆とれども詔ふたる事の考課を立候漢  
書九十九西域傳に烏弋山離國以下曰安息長老傳聞。候





○漢興にて烽をすゞりたりとて是時匈奴のすゞりと  
うのを守つて雄異紀ふ燐羸といふ人の名をもとと刻む  
は矢にはまざらなとひすとこもれだがひて鹿の辛と云  
非なりとてよしすゞりもづくは身アト福

○近に先代の漢後大度中養えを蒙れ領地を捨てうけ  
事山家を不納と責めつゝすのほる林野  
をもとと付とと伐して伐すらばりとおれとすまうに  
をとまし農夫とれんうていわゆるよふくよす  
ゆびとすわらひのまをと向ふ雪ははす、あく、あ  
はすと崩すとすれりとれとて落がれり家とうち  
とすれりとまくとふすきとくとくとくとくとく  
けりてはれりとまくとふすきとくとくとくとくとく

強のあらひれるの塞<sup>ヤギ</sup>とくとあらむ所へと見ゆ  
さとくアリ一あらうなに塞とうり、めぐれがわくふく  
いとくわりとくわりとくわり凝雪<sup>コロ</sup>の水すくににく  
けじらとく雪ふ充下<sup>ク</sup>とまをと落きとふる氣<sup>カキ</sup>とて  
やれとれとれとれとれとととととととととととと  
かと雪ひとすりとくとけりとくとくとくとくとく  
夏に生てあふりとくとくとくとくとくとくとく

○平ぶみれりとくのアドヒの園をばくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

按すれり拂ひて本邦少てもさけりふ今之地をられ  
朝ひるアタシナリ和名抄曰曇云篇也旦及耕麦地也  
唐顏耕曰穀曰本紀師說ハ太外トカリ也ノリフ日  
本紀仁賢天皇卷韓泉郎嘆トリ人のねうと門  
をうアタシ紀自注柯羅摩族飯院銀也云  
説トサリキと申說ノル計まんと云又松岡門人仲  
年人著アト傳羽都林小川嘆字マクルト記トサリ又  
ラム此嘆字モ亦傳某代後モテ讀字マクルと銀の言  
に基アレハシツモナカニ引テトノ和名と院モア  
スアリケリの御ひす保民門の義に所在の西に阿ケム  
ドリアの荒野アリシウドトアリアツ不善矣君の事にて  
たまらざる方モテ手すりまでけはげふ松上ア殿の入

アヘド御歎とさりてもとむと物を有す每朝の内モ  
アヘアラシウドリ

○加茂美潤氏冠群考ハアマジアヌミアヌミアヌ生事  
ト云ハ役字アヌミアヌミアヌモ常アヌ莫アヌモアヌ皆アヌ  
シムシムおまも接はセホカガリテ取味アヌヤアラシウドリ  
ク内に接する事アヌアヌモアヌベアテ物のモロヒトウテ  
アラシウドリノ紀アヌ葉田豆田をアヌアヌアヌアヌモアヌ  
ナシアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌ  
アヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌ  
アヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌ  
アヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌアヌ

ふまくとだり生のぼりてくにせ本のぼりよ  
せばほくはく門の事ひをうへせれを漢みてはせんりせ  
せうほくとく人曰易曰洞之以風雨也風景物を洞さんや  
せうえたりちるも向きまよとまつりすむ教

○名跡ふらの村ひが瓦井社社のすりあくせよとまつりす  
とくべ非く万葉集中のすりあくせよとまつりす  
ふかわすむ行被すりあくせよとまつりす  
とくに後ひねまとゆうたらんよりの言ひまつりす  
守り意トなが一處のさよ社またけまうてらるべ其事の  
あよ子一粒の木乃みおれと因より社ますかとみ秋櫻と  
引ひてせり出しこそかきて木のさへあをやましにまよし  
やうれ圓鏡の尾代の櫻をん漢みての廟ひがくと萬廟開帝

廟のれうりゆくよくやくよし御童蒙にあひの

○舊本民宿よニ原稿ふ屠者々稼業おひ宿アヤマツすやまつても  
屠者くちり立年タチニの在所とあやどりて餘戸の男は活うる  
下わらわ宿園のんあや下に能くとりすのをくらう生村の  
てくらう屠者せお村小活アヤマツやざてはふと負うるやまとぞ  
けくや下割のねお館にうまとせうりの圓鏡

○は西院村をくらうかくとく西もといとくの就と急記資  
蓋玉記も六書をあらうてもけほの口ひみふすよと  
つるをもはく院の裏うてけ西院とひと曾ノ假景空とよび  
まとねづふ向う西院の御傳の歌あれかのうとよび  
と向人の話すに捨赤井にまもと院ふ京守西院より  
○大和のふね原のふ山代くもふくふくふくに

本草綱目

十三

日暮に蓋ねば薄のり人を以て肉身に頗る幸つたより  
是とあひてやうがんせよとあるに「先ま病氣  
つねうてうちかは屋のふれりやはるんいとおれ森  
ふやのわきよきくに宿す肉身やすそじゆに候の  
男のよきよきもしていふ事やおひきがのうとさんと  
おうおうへりやれとすよおまよのうとおがのく  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおおお  
おおおおおおおおおお  
おおおおおおおおお  
おおおおおおおお  
おおおおおおお  
おおおおおお  
おおおおお  
おおおお  
おおお  
おお  
お

事あてぢよ不動と夫ひくとトロトロとまゝに持  
ふ見る事あつたおほのたゞは藤の木と石がれれとだま  
れぬり改め改めへ先様のナホアリルヒトモハシテ  
ハシタマミタモハシタトモアヌエテはゆにけ  
チハ唱てゑちとどもりトモトモトモトモトモ  
マス内と云ひてナヨムアハチの五一封をすに傳  
ナムテキモカドウツクアツクアツクアツクアツ  
ガシテ一ノ興福院村ツコムヒトサクツコムヒト  
小山寺と云ひて興福院村界外の里やはつてふり  
は興福院村に境す一ノ弘法院すつてふりが實味子  
同は上郡にうつむきとも名南郡ナツの興福院村

○あゆの名改めりて三ノれどふしのすくべ変遷  
 あおやうてなじよも滄桑おまじい伝ふすぞうざ  
 わく改ふ本盤纏づ流りしもとよりはゆく  
 もぬきくたりて高澤の名たむすり松石川澤よ、まよ  
 はのまよ流田作母のあくはまふうるどつて吉澤のうぐまよ  
 理うちとくわが町にけぬれまくわんうま木葉小波  
 ぐのうで用ひてまほら即ちうさくとよのうすそ  
 おりあれ六味もああもくうきも内野レバをすまのとす  
 ぬ竹シタふせごくりうとかせすり内野シナにすほりそくよ  
 めくしのえ神ミハラのとくにやもくわゆふれす  
 ぐの煙シガくばなりとくでくよがくじときくにやくふのとぞ  
 うとくぐくもうすとくおもぞうげうわく

〇有原集解序より  
 すはよれいづくみをくびて原集十、一のにていわく、構  
 ともわらうすすくとくとくふけしはくらまよ、そば  
 のはやせすふれんちよすたつて、ぞりすにはと一音ふくや  
 ますすまつるもととくびがひくらはもととくすざうら  
 せりとすがすれど、こかくくとくとく、とくとくらはく  
 それから構のたなととくとくのとまのひくらとく  
 ほ京橋の下をわくとくとくをひきとくはくはく採集の  
 ちくわうりとくとく構ふねもあわうりえんう一見、お尋え猿  
 九年に紀されしとくとくのたよ六日の方乃葉振り奥  
 院まよ、百宗所の間、國家をとおさん左官益本の猿  
 えたふの猿も下の谷も猿すしそれふねより二月の元の

世界と云つて、才男の保月は四十歳より八十歳より  
ふ様もやせ、半里から町から約一里なり。方凡二十町歩で一日にして宿たのは必ずうさなぐ。  
そんじて一日に宿されまくらやうのうたどりとすりや  
とらすみどりは、まくらをまくらすうまうら、まくらだま  
タヤキをまくらす。金まとて平二千貫のじわい。  
あてタニマウリし、み後は六町うちのがう道のや、並木  
の様のとて、今朝は夜にありぬとまきり。ひ  
まくら、うらへ後は宿ふ一日をせり。おのとまきりてお様  
あが、或様れをのとほりて、様の様ふき。うきり  
ひきとねとやきて、くわばたねをすてば、うきり  
うきとねのまよひ、まよひをすてて、翁とねの

物語あり。かは様と並らむ。五うきと貞を、  
半うきと者を、しよ州名の志。ひたゆく、半うき  
とやうく、うきを、ひたゆく、うきを、うきを、  
か下はせ。か下はせり。もともとひうきの者を、  
おひくとる。かはくとせり。小解り。帳幕。ぬ十百を  
かく。一。小解り。ひがくと大半の川道が、  
さまで、ま店を、もと、ひうきの舟運り。往す  
きがち。くかうて、うと花の唐も、世界の変遷く  
のう。

○竹喬義王のち、かはくと、小解り。今と、うふせび  
丸山海園。十小部と、ねはくと、南龍湖の、これ  
と、小部と、車峰。みれ、小せり。うふくと、うとり

又ある所の上の小町へ小町堂の上へりては  
は京御まつての補陀落の萬國寺をもあつて  
さればその小町へ北へ抜むが難とつてふあひ  
すからとておだらかにてとつても暮の東に角  
里にさういはありとて御みゆゑふにせうそれ  
のもの萬國寺の傍へづりすもけますすの事建立  
とあてよけすこやとすの牌すま拂ふふもく  
すれどしておもむりより中止めとて岩を不動山  
もとおふせりておまかせた比えのとれす  
つるのれりておば比えの麓のよりつるすやみ跡を  
みやすやぬもとへ考へるすとまち村のよき郎  
とりが萬ふ小郎也。一郎は代姓の名を小郎號り

とときこわく小町の基徳真淵の牌と勝出を  
了てくわむと見入る。五厘の蓋肩銀ふゝも付の意情もた  
れと素そりうがむよどくおんほりとうれいれが  
あんよとまれ小郎に就王の手付すりて例を九郎とす  
もと様の下にすりて比えの隣へりすうりありき郎  
の妻これ萬ふの娘で、一年夫をがうくとておま  
縁ではぬ幼小矣。

○京御小町の御子がおおねぎりおれ焉へてこれ共  
一のせしのふとつりおもくへ難能なる。一子この寺  
か家の名とけり。おもくわらががおとめしまくきの年  
をうむ。

○即ちの原より近江守舊の火ひの水内は未詳のあつて

五川の名沙綱シナハシとすとすと里のりむらとよざくわがふるえ原宗  
トウスカドウツル山通守の様に間の人原宗小原子と  
アリカリとすと室蓋又の端とすととしの即ちり二マ  
候とすととすとすと不拘正則領小すとねびと人と言と  
ばげてりよきはあばれんもとすとなまとめりり見と  
まらす母の原宗とほあらむれいふとすとあら原宗の  
井源ふつまうるむとととととととととととととととととと  
かねふうと一考と草津とおとすととすのふととねがはまは  
の萬が原宗とやあらんとととととととととととととと  
不すとすと六年から天平勝と元年の原創とて開祖  
の日とく良辨僧とすと興興正善庵建長寺開院と  
かと市庵とあらむはひととととととととととととととと

龍とそくじとすとととととととととととととととととと  
其のとととととととととととととととととととととと  
れはぬととと

○万葉集中牛三高市連史人をもと付けてあらわるる  
時と二その中に君妹子にしまれどととととととととと  
さととととととととととととととととととととととと  
次林社ととととととととととととととととととととと  
達ととととととととととととととととととととと  
小窓ととととととととととととととととととと  
あまのととととととととととととととととととと  
松名野のとととととととととととととととと  
ととととととととととととととととととととと

そのまへとすをすうひへや車にのけばもとよてゆくす  
うゆきどはおがから時そのぎ。財物おと無べ記さま。一えう  
うりへ石がる角の葉ふか。あらわしづるをづれふと  
づれふと

○讚岐象野の種猪代様小平の德<sup>ヒル</sup>をほんか取その  
古墳<sup>カツボ</sup>傳ひうべくや此墳を猪<sup>ハグ</sup>移さんとせし。金光  
院<sup>カミナカニ</sup>宿乃住僧のまた一人もありて、うぶをさす  
うとほふうさつまんをうわざりしもぐれ。唱つて、そ  
うくぬじて、はゆく、ほの墓をうぶ。トモひて、すくまふ  
そくまふとぞ。日は、むきとつて、ふりやまう。はねまんのね  
の邊<sup>カタ</sup>の草<sup>シダ</sup>すまふのかみと、の墓をうぶ。清々として、いと  
たり。アハズア阿波の里<sup>アハズ</sup>河<sup>カワ</sup>すまほ女入水<sup>ミズ</sup>をゆぢとす。

○之處<sup>カタ</sup>のむきとぞ。信<sup>ヒム</sup>くせなんとす。お松代記<sup>ヒル</sup>りよ  
写<sup>ヒム</sup>ありては、ゆめゆめ、てほそもの。らむて、ちまくと  
よもじく。むすめ、て、まなむる。たすかのゆゑ、や  
だかりと、ゆめ、と、かくく。かくくと、すきと、かくく。例<sup>ヒル</sup>で、  
まほみる紀<sup>ヒル</sup>と、お作者<sup>アサヒ</sup>と、うがく。應<sup>エイ</sup>二年と、こやうと、お  
ト、後<sup>アフ</sup>り<sup>アフ</sup>て、三<sup>ミ</sup>年<sup>ミ</sup>。源<sup>スル</sup>新<sup>ヒ</sup>の紀<sup>ヒル</sup>、あらえ光<sup>ヒル</sup>を、すくやひの  
本<sup>ヒ</sup>に、ちゆく記<sup>ヒル</sup>せう。數<sup>ヒル</sup>し、それが、すくに、讚岐<sup>ヒル</sup>と、ほのう  
訪<sup>ヒル</sup>めあると、象<sup>ヒル</sup>野<sup>ヒル</sup>。一里余<sup>ヒル</sup>の、すも、過<sup>ハシ</sup>海<sup>ヒル</sup>と、りすく。  
古<sup>ヒル</sup>暮<sup>ヒル</sup>りて、過<sup>ハシ</sup>海<sup>ヒル</sup>。それとなくなり、新王<sup>ヒル</sup>の、必<sup>ヒル</sup>居<sup>ヒル</sup>。中  
國<sup>ヒル</sup>に、至<sup>ヒル</sup>。海<sup>ヒル</sup>を、たる。此<sup>ヒル</sup>の、遠<sup>ヒル</sup>立<sup>ヒル</sup>を、ぬく。是<sup>ヒル</sup>の、町<sup>ヒル</sup>、  
には、まくは、まくは、を、なう。それと、お國<sup>ヒル</sup>の、中<sup>ヒル</sup>、  
には、まくは、まくは、を、なう。それと、お國<sup>ヒル</sup>の、中<sup>ヒル</sup>、

裏山の山はもとせんりにまじめよしもんりと  
アリル一

○吾輩の人は政直の畜生、その辯とて一筋とまうらつて  
男をさりてたゞちかく逃げのちゆうりとてひのまふを  
アリ。すれども產出林の多りともじよて猪の子が  
小猪も畜生の畜生とせば、御て備へりうやくて  
そりともハ畜生食の術で、まわ行かずあつて此  
畜生とうぢてはおもむびの上畜生食村とい  
アリ。差しがぬ一物と膳とを直るの考ふ凡圖の  
クス小山有河口里れふ小山牛矢より例ふてふの儀ふ  
あれ。山儀村のいと畜生乃畜生に運りと畜生の  
まみじは山のいと畜生の畜生がやづてけりと局せざる

】やかくもきなをもひむじおひでてみすすのとぞもよぢ  
ハ計の序ひ序ひ序ひ序ひ序ひ序ひ序ひ序ひ序  
○石見の人々の林下の計乃日餘ち角山の外は子野山は  
まわるて小河のたまはり。元春年間のははて  
山崩と家とくとちひすけは半生ゆきを去てたるふ  
ふうせりけ等計儀もねれはふきて海ふ漂ひ船ひ  
とれうげりもなどねり持とつ計具をとどく。しゆのね  
乃木儀ひ是も(木儀ひもくくわよ大きほど)すのねひ  
幸ひ行基もとくれども行基も幸ひはふく廣幸もとひ  
タのまへまの福もと等くスケの計ひ三十二年行基  
アリ。アリ。里あり林下に地主の孫家(おやい)と名り  
まくとゆきはるくとゆきとゆきとゆきとゆきとゆき

在捨てぬせりに霜寫額シナガタアリシテ、墨竹、津和野  
候。達セシムアリ余是モよのく運石井頭下ト處す  
小築カツキ、うすき、戸内ノアリ。此れは、うそトウヒ傳ト  
アレを傳セテ、アリ。此處のあくと、ソドモアリ。此  
スモ、此ふゆうアリ。朱のまくヘ、壺と塩町、リヒナリ。トマ  
シテ、モ族モツクの、人乃骨を朱カテ、鉢ハチ、モコモアラル。此骨  
トアリ。此骨、人乃骨也。アリ。此骨、人乃骨也。此骨、人乃骨也。  
のほ乃肉、人乃骨也。アリ。此骨、人乃骨也。

○近に、景の廣山の、以京に據シテ、不<sup>レ</sup>知處。事し、  
石山秋原と云ひ。此處す。當此御けす。あらかじめ、  
舟々來所、而まつて、月をうて、頃廣竹石のまつかり。

中奥書たる事。

竊前ニ、此の事にあたゞらひ、其事と用  
於此石山より、此の事と、三年、ふそく、あらかじめ、此骨  
改めて、深向移覽すや。縛れま付、  
轍ハタケ。

やれが、かの三、二、三、四月、石山、伏達三井、鳥居ト、山門  
と、御表に、御立して、かと、此處、御立。——予西、知  
此石山の、中、此の、はづて、御立、ようつて、遠年、もみ、  
すり、若女乃、侍、詫ねて、ゆけたと、多く人の、お出で  
る。さん、此源氏も、うて、作、や、うて、之院乃、非の院よ

安藤馬童ノ業女七端は寺外ればやふりとばへまつせ  
は説ふありててふかうびうてせゆ自業すしゆや一物  
水乃木とまことの二年ち等てひる一石山が木事ふお  
まこと木ふせみてせりなしをも生れりてすゆすら  
とりよめれうべも壁にあひて山門ほの家ふ宿もうが  
水面のすう树本のるたん西光の毛い體をようくうる  
服とぬくうせよろひ舟と窓も一壁下は今まよ  
ひきくすくすくもとま盡つてすゆふねり

○野まひづくはやまてもすす佛をとつすすきくふるを  
室山山の例せば、野山ともか研山ともか神山の時比  
一覽に血舌式人賑式ドニ十三に七す孟蘭盆供養料  
東西佐法寺へまち野まひ當もを神うりと引うす

極ふ小此の法かと海ふ諸名所集耶も此は次すよだ  
向く浦生郡川宇りて里ふてて孫記とよの山縣人にゆるそ  
ゆり安吉山雪野ち元刀天皇和経三年河基ま鹿岡  
墓にて龍宮よりお祀せりなりと續もと先に帝寶惠  
元氣トテ一院院都ア龍王寺トぬう鐘樓は龍壽鐘殿  
の宸翰乃額を掲げて今も雪野寺とひて處山安樂  
家乃律院へ被延古式にも御ちりぐくも萬疋紙をば  
すくらむに黒てじづりや此縛て倒のほの考案小まみ  
○私本寺業其すよ美深く、那木乃寺の邊にいと審令  
トリ奇とぞ人間のへくも海うねるの際すり  
私乃寺邊にいとありてせどいとひ私本寺とぞうも

すうへんきのくわくをうなぐとせうんとみどりと和あわる  
生郡トタスカカハ特の邊色に松本村トツマのまづ  
○栗栖所ニ浦小二所人皆守り契冲門園家ねながと  
て毛安郡栗所久間須入三浦郡小栗<sup>キミ</sup>須入の名凡ニ  
宣子やの栗野<sup>ハ</sup>の栖よと男てくらべれ身<sup>スル</sup>家<sup>ム</sup>が<sup>アリ</sup>ぐ  
いとびださ<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>候<sup>フ</sup>乃<sup>ハ</sup>あらわや小栗<sup>ハ</sup>小栗栖<sup>シ</sup>と  
くらは<sup>シ</sup>栗<sup>シ</sup>と黒<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>すすきの小郡<sup>ヤ</sup>幸<sup>シ</sup>ふみゆく  
旨<sup>シ</sup>毛安郡もととし官新撰六帖<sup>ハ</sup>光俊<sup>シテ</sup>するもくろ  
よ<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>  
高<sup>タカ</sup>段<sup>タカ</sup>毛<sup>タカ</sup>也<sup>タカ</sup>三<sup>ミ</sup>代<sup>ミ</sup>裏<sup>ミ</sup>深<sup>ミ</sup>六<sup>シ</sup>四<sup>シ</sup>十二<sup>シ</sup>延<sup>ミ</sup>喜<sup>シ</sup>式<sup>シ</sup>方<sup>ミ</sup>十四<sup>シ</sup>水<sup>ミ</sup>  
式<sup>シ</sup>水<sup>ミ</sup>室<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>ほ<sup>シ</sup>成<sup>シ</sup>也<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>今<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>便<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
安郡栗栖<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>勝<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>覽<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>栗<sup>シ</sup>六<sup>シ</sup>大<sup>シ</sup>能<sup>シ</sup>  
て旅人<sup>シ</sup>同<sup>シ</sup>秋<sup>シ</sup>のくわくの小<sup>シ</sup>も<sup>シ</sup>お<sup>シ</sup>じらん<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>りて<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>乃<sup>シ</sup>す<sup>シ</sup>人<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>郡栗<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>栗<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>一<sup>シ</sup>  
御<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>の毛<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>浦<sup>シ</sup>に<sup>シ</sup>く<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>送<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>集<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>辨<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>  
○大<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>二<sup>シ</sup>所<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>丹波<sup>シ</sup>の界<sup>シ</sup>標<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>兩<sup>シ</sup>信<sup>シ</sup>老<sup>シ</sup>の<sup>シ</sup>標<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>方<sup>シ</sup>道<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>和<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
和<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>  
毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>毛<sup>シ</sup>

○おのたゞひておはくとひが方失算すこもるお二五  
紀行はせひ名所すと草すと備ほ國へるへく考  
えれ紀行ふ経らうとすりけ某オーレ奉に經奇せすふ  
えくよほ國の次比翁のにてんのどく一様すの遣新羅  
ほ人の事ひ中東船へ海路、上へ前のオニキ庫浦<sup>音津</sup>方三  
ヶ手<sup>ハサ</sup>はす<sup>ア</sup>萬度等々多麻の浦第六神<sup>カミシマ</sup><sup>カミシマ</sup>佐半船<sup>ハヤシマ</sup>ハヤシマ  
モナセ第へじうのまともうこれをばあくと備ほの  
萬<sup>カウ</sup>の浦乃景也<sup>カウ</sup>ノ屬物<sup>カウ</sup>、思長<sup>カウ</sup>すかふまの後<sup>カウ</sup>より  
おほほほの萬度石<sup>カウ</sup>、萬度<sup>カウ</sup>ひよ多麻の浦  
に船をそよとすり立奇<sup>カウ</sup>すむ<sup>カウ</sup>のけつとむむ  
アツ浦<sup>アツカウ</sup>とすり立奇<sup>カウ</sup>すむ<sup>カウ</sup>のけつとむむ  
トシム<sup>トシム</sup>、あひ中世<sup>カウ</sup>の栗くまを被浦のくま<sup>カウ</sup>にて

紀と子に需じこ<sup>フジナ</sup>尾<sup>テ</sup>の萬<sup>カウ</sup>とぞとせ又舟役<sup>カウ</sup>と  
きれ西<sup>カウ</sup>金<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>保局<sup>カウ</sup>初<sup>カウ</sup>に<sup>カウ</sup>破<sup>カウ</sup>のや<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>紙  
ふうり<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>んそと<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>事<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>ふ<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>紀行  
の國<sup>カウ</sup>無<sup>カウ</sup>那<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>浦<sup>カウ</sup>の國<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>る<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>教<sup>カウ</sup>そら<sup>カウ</sup>て<sup>カウ</sup>は<sup>カウ</sup>保  
昌<sup>カウ</sup>ノ飯<sup>カウ</sup>ノ刀<sup>カウ</sup>首<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>せ<sup>カウ</sup>る<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>ま<sup>カウ</sup>れ<sup>カウ</sup>葉<sup>カウ</sup>花<sup>カウ</sup>あ<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>首<sup>カウ</sup>  
の卷<sup>カウ</sup>に<sup>カウ</sup>化<sup>カウ</sup>殿<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>お<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>は<sup>カウ</sup>ゆ<sup>カウ</sup>は<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>ゆ<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>ら<sup>カウ</sup>ら<sup>カウ</sup>  
と<sup>カウ</sup>れ<sup>カウ</sup>當<sup>カウ</sup>す<sup>カウ</sup>に<sup>カウ</sup>保局<sup>カウ</sup>初<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>ま<sup>カウ</sup>く<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>浦<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>つ<sup>カウ</sup>り  
と<sup>カウ</sup>わ<sup>カウ</sup>ま<sup>カウ</sup>あ<sup>カウ</sup>に<sup>カウ</sup>て<sup>カウ</sup>和<sup>カウ</sup>泉<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>は<sup>カウ</sup>さ<sup>カウ</sup>り<sup>カウ</sup>御<sup>カウ</sup>立<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>浦<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>風<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>人<sup>カウ</sup>  
考<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>も<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>考<sup>カウ</sup>く<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>は<sup>カウ</sup>ふ<sup>カウ</sup>の<sup>カウ</sup>浦<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>負<sup>カウ</sup>せ<sup>カウ</sup>る  
と<sup>カウ</sup>か<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>う<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>も<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>せ<sup>カウ</sup>い<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>お<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>う<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>人<sup>カウ</sup>  
の<sup>カウ</sup>れ<sup>カウ</sup>ゆ<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>ま<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>う<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>う<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>う<sup>カウ</sup>と<sup>カウ</sup>人<sup>カウ</sup>

作者の事跡と云ふのは、まだあつてわかつて、作者の  
事跡で、まことうれしきものなり。すなはて、筆の手に因爲して  
國の氣をもつたる御陰の結果かともいへば、むづかしい筆の  
手とほんの少くの筆が、荷板の赤丹は、採りて、積み起し  
のやうか、かねておもがく。——此處の筆の運びと、筆の  
乃本情とぞ

○山海經序那小佐はの里より三代東征久觀十三  
年同八月小剣をて百姓送葬の心を哀れ、悔ふ  
下坂上佐はとよそむかへまことに佐比翁の靈臺式  
すす九重送葬之車更簡陋於橋頭トシテ、又其母  
に佐比翁を冥途にて、其の車をかみし上地藏  
きと化す。——此葬所は小石塔多々あり

石像乃ち兵主の御子也。——此人の名  
は、尚も未だ

○羽林國初の主は權君タジと云ふ。其妻是鳥尊とて、世  
主は對馬主との名とて、からて主尊は羽林イリ、傳説ひ  
て、不對馬乃西かとて、其前と云々。神功皇后御  
船を序化せしと、對馬より九州、御船より南を前  
とて、その事のあつたとぞ。私接主も、一足新見、廢主も、  
とて、御代紀牛一書の後アヒ。

○尾張乃ほ主の神は主郎時獨りと人うけは、有  
乃記小舟、うは舟のぼりつゝもととさうひ、うふごくや  
御船を序化せしと、御船より南を前とて、その事のあつたとぞ。  
私接主も、一足新見、廢主も、とて、御代紀牛一書の後アヒ。

○尾張乃ほ主の神は主郎時獨りと人うけは、有

ノキシテアモナハル

○在船のふやうすりやうやうまわるをよりねり御  
ノリムシテ御統をもとまわる統ノリモタマクモテハモジ  
リムスリアリ凡俗信の御上モトモテ御事。アリ京橋若狭門の  
説小るを安神の背つすらモタカト考ヘリ此につまて荷田春油  
加賀吉岡と京延後是を著出る。モレドウアレナト年  
干の傳解と歌セバ

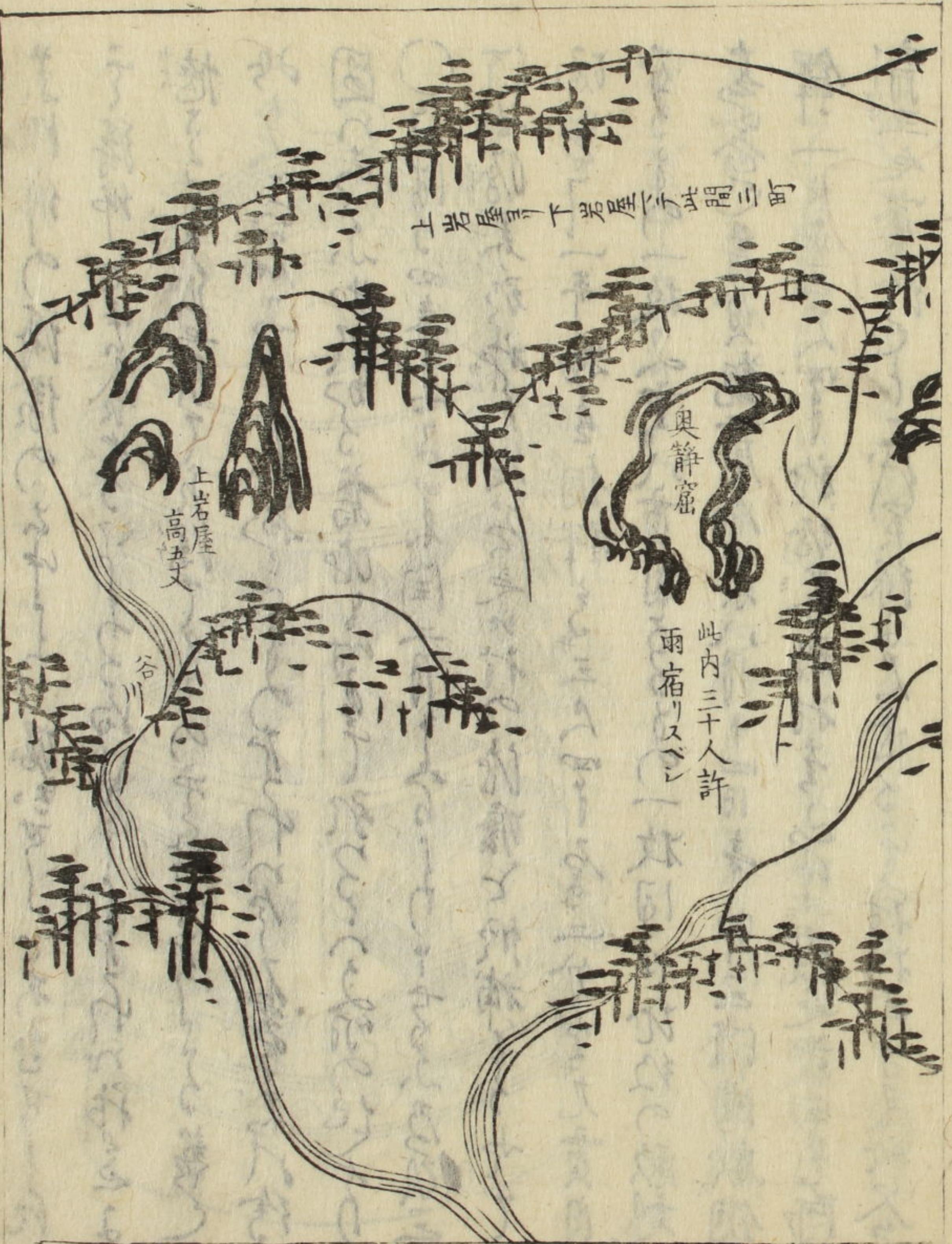
○まゝ葉原オ十三の七キニテ處女等之席皆垂有。續麻  
成長門之浦舟。十萬音樂子爾。無往來者。阿那之海之荒  
磯之於舟。下界よりよき門乃チモモ安藝モア那之浦に住  
キテソヒヨウモセツヘツヒア那那ハ其門がま門くアリハ其門  
乃浦よりよき御園モアハアリケンヒ長寺がふ一主モア安藝

あり仕事モアトモラサムモアビタヒテ高ヒハガ  
ホア旅乃作ヒアリカモキ門一圓アリ

○美樂其は御はましらアヘの度不ア代えん静の着合  
アリヤドアラヌモヤアリカゲアリモアラハガア  
アリモアラヒアリハ猶歴の石室殿と云ふアリハ那不  
アリ浦モアリモアリ年小蘿通神とアリ人石人御庭御屋  
の門アリ京師通の日旅セアリ御モタカミアリモ  
國色あ郎小蘿窟ヒアリモアヒキムモ御と坐る村  
モア近徳堂ヒアリモアリ小社アリテ靜権次ノ移モ  
伊念アリテ社と開く内モアラヘ株間モサモタノ  
詩アリモアリモアラモアラモアラモアラモアラモア  
アラモアラモアラモアラモアラモアラモアラモアラモアラ

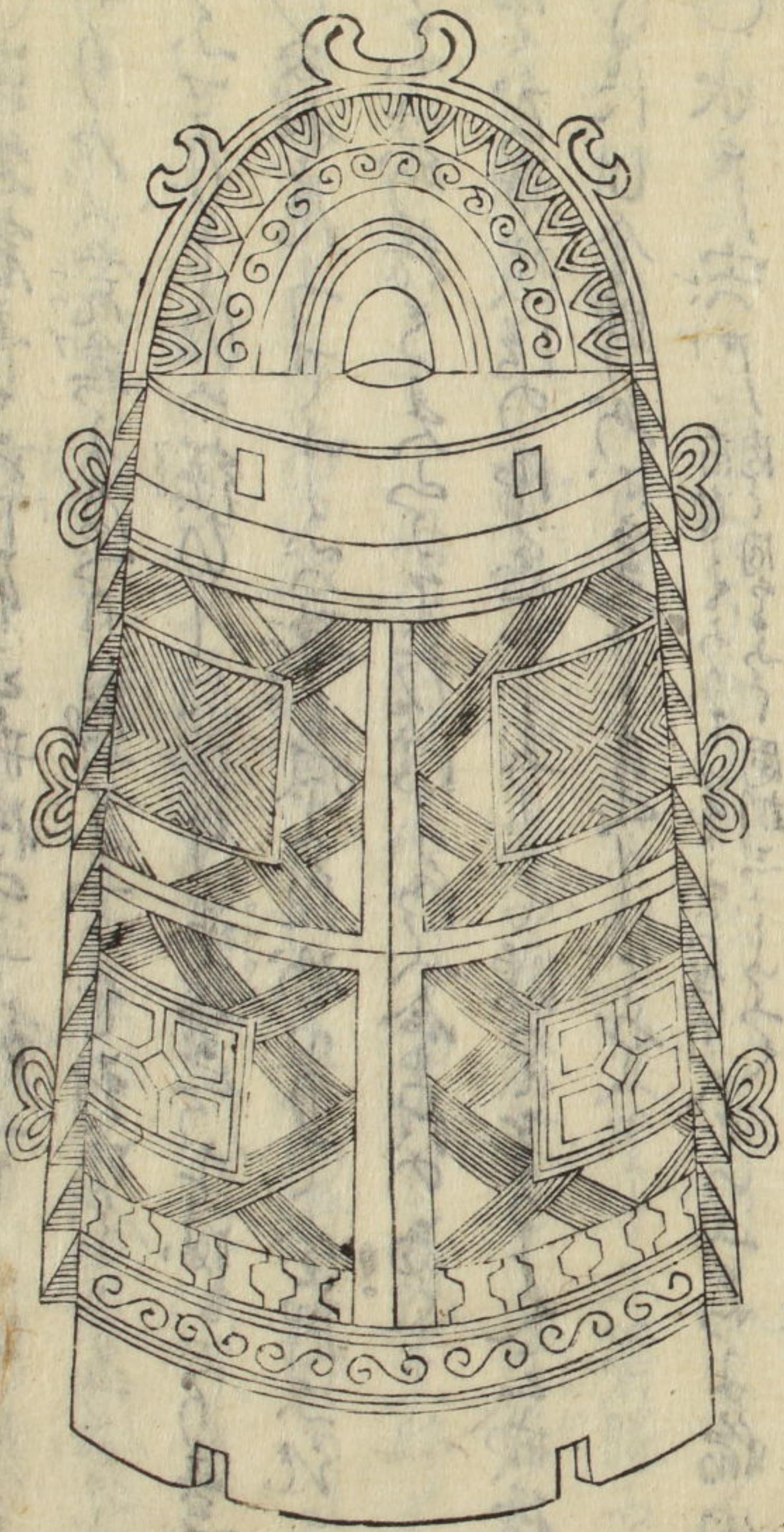
石見國邑知郡 岩屋村

靜窟圖



某師佛の彌縫の古事より愚もアヒトと云ひせんに  
テ縫拂と生食をうつてうつぬきアヒトアヒトが形をよ  
懃アヒトシ松井アヒト久澤アヒトモニヤ持ナヒム朝と  
此アヒトシ石アヒト志アヒトシマツナウハシアヒトシ常アヒト  
國アヒトシ小如八カク萬字アヒトシテ取ツルヘアヒトシ有り  
○己は四年春ノ某國二月よりアヒトセシム乃アヒト  
行ふ勝美殿神社ノ今ノ之ニ村の北境と被補アヒトセ  
源出アヒト一寺物を銅鐸アヒト三メテ四メテ石ナ二分重ナ九貫圓  
アヒト一枚又重ナ八貫圓アヒト一枚圓ナ七段の勧刻  
其處アヒト青白觀ニ庚辰年八月十四日辛卯二河國獻銅  
鐸一アヒト三人署アヒト於施主於村主ノ年上役之武田毛阿  
育王之實澤アヒト三代宗派アヒトシテモ村ね山中モセラ

乃ヒト志アヒトの里敷四里に石をアヒト邊モ小き御室と  
サアリ坂先アヒトハ付シテモ貞觀の附院に石をアヒト  
キハナ考アヒトナムアヒトのものんと號アヒトシテ  
セシムビセシムキ)



○荒巣觀音は日を二戒燈の一切事て本寧府小  
あり今ハ荒巣<sup>ララブ</sup>より是<sup>ト</sup>を対局とぞす  
つふでんとてはめ<sup>モ</sup>猿<sup>モ</sup>にゆすりま<sup>ト</sup>をゆきぞりま<sup>ス</sup>  
らるせ庵<sup>ア</sup>すてすふ<sup>モ</sup>珠<sup>ララカ</sup>め<sup>タ</sup>かありて金牌<sup>モ</sup>託<sup>シ</sup>せ  
うおせが釋<sup>モ</sup>ちみ<sup>ス</sup>そそだはく<sup>モ</sup>會<sup>モ</sup>のあ  
至<sup>モ</sup>此<sup>モ</sup>帝<sup>モ</sup>後<sup>モ</sup>の印<sup>モ</sup>をとすて贈<sup>モ</sup>よもと<sup>ス</sup>之<sup>ニ</sup>戒<sup>モ</sup>  
ト<sup>ム</sup>には金牌<sup>モ</sup>が<sup>モ</sup>すま<sup>ス</sup>る<sup>モ</sup>と<sup>ガ</sup>

○水<sup>モ</sup>穴<sup>モ</sup>戸<sup>モ</sup>首<sup>モ</sup>身<sup>モ</sup>あく<sup>テ</sup>完<sup>ト</sup>太<sup>ハ</sup>保<sup>リ</sup>と<sup>リ</sup>すもよ端<sup>モ</sup>固<sup>モ</sup>封<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>そ  
水<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>れ<sup>モ</sup>小<sup>モ</sup>祠<sup>モ</sup>ア<sup>リ</sup>と<sup>リ</sup>崖<sup>モ</sup>れ<sup>カ</sup>と<sup>リ</sup>終<sup>モ</sup>す  
に<sup>モ</sup>くろ<sup>モ</sup>ら<sup>リ</sup>と<sup>リ</sup>不<sup>ト</sup>久<sup>ル</sup>而<sup>モ</sup>て<sup>ス</sup>れ<sup>モ</sup>人<sup>モ</sup>碧<sup>モ</sup>の<sup>カ</sup>  
彼<sup>モ</sup>水<sup>モ</sup>か<sup>レ</sup>て<sup>カ</sup>く<sup>モ</sup>ふ<sup>ト</sup>え<sup>ス</sup>う<sup>ゲ</sup>と<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>大<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>歯<sup>モ</sup>骨<sup>モ</sup>  
れ<sup>カ</sup>碧<sup>モ</sup>水<sup>モ</sup>ま<sup>ス</sup>波<sup>モ</sup>さ<sup>ス</sup>波<sup>モ</sup>は<sup>ス</sup>り<sup>テ</sup>ね<sup>カ</sup>り

店の捨<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>て<sup>カ</sup>高<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>う<sup>カ</sup>一<sup>モ</sup>の重<sup>モ</sup>ミ<sup>カ</sup>入<sup>モ</sup>百<sup>モ</sup>  
假<sup>モ</sup>乃<sup>モ</sup>寝<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>の<sup>カ</sup>経<sup>モ</sup>小<sup>モ</sup>所<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>れ<sup>カ</sup>喰<sup>モ</sup>全<sup>モ</sup>体<sup>モ</sup>引<sup>モ</sup>ぐ<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>  
差<sup>モ</sup>手<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>て<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>ぬ<sup>モ</sup>傍<sup>モ</sup>視<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>か<sup>レ</sup>ゆ<sup>カ</sup>緑<sup>モ</sup>空<sup>モ</sup>ゆ<sup>カ</sup>る<sup>モ</sup>筋<sup>モ</sup>  
身<sup>モ</sup>水<sup>モ</sup>を<sup>ス</sup>あ<sup>ス</sup>ま<sup>ス</sup>く<sup>モ</sup>か<sup>レ</sup>の<sup>カ</sup>波<sup>モ</sup>を<sup>ス</sup>波<sup>モ</sup>う<sup>カ</sup>く<sup>モ</sup>ハ<sup>ス</sup>股<sup>モ</sup>  
地<sup>モ</sup>乃<sup>モ</sup>草<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>す<sup>カ</sup>と<sup>ス</sup>や<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>た<sup>ス</sup>は<sup>ス</sup>店<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>く<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>ぬ  
○人<sup>モ</sup>心<sup>モ</sup>痛<sup>モ</sup>て<sup>カ</sup>仰<sup>モ</sup>は<sup>ス</sup>小<sup>モ</sup>著<sup>モ</sup>中<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>こ<sup>リ</sup>す<sup>カ</sup>小<sup>モ</sup>著<sup>モ</sup>隊<sup>モ</sup>  
つ<sup>カ</sup>有<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>通<sup>カ</sup>可<sup>カ</sup>襲<sup>モ</sup>の<sup>カ</sup>幕<sup>モ</sup>下<sup>モ</sup>著<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>  
一<sup>モ</sup>手<sup>モ</sup>、<sup>カ</sup>有<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>の<sup>カ</sup>事<sup>モ</sup>あ<sup>リ</sup>事<sup>モ</sup>本<sup>モ</sup>紀<sup>モ</sup>禁<sup>モ</sup>制<sup>モ</sup>  
是<sup>モ</sup>も<sup>カ</sup>有<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>モ</sup>背<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>モ</sup>達<sup>モ</sup>れ<sup>カ</sup>る<sup>モ</sup>  
と<sup>ス</sup>ひ<sup>カ</sup>下<sup>モ</sup>て<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>モ</sup>腰<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>と<sup>ス</sup>人<sup>モ</sup>付<sup>ス</sup>し<sup>カ</sup>腰<sup>モ</sup>

ひよひじ付せ事とひのひせりとけづて天あ裏天  
の陵もそにて是れ矣能くとほとびに祭る事もといひ故  
乃も當外打のけづてに酒をすが肩高とひすの  
桓武天皇の御めう御氏賀天を后まへ御寺一ノ寺  
セモく浦川代へつす」王五代の國よしも諱  
代えりあくまどとひすめに平安城周圍の桓武天  
皇の陵は天孫の系名と云ふに平家家の御寺  
よりて終よかむと桓武天皇と祀る石碑も  
てテテのこそて傳ふあ流と仰るへりぐりれ源乃  
あやうやうれんせ陵をとれ御ま代御母(母)と云ふ  
されとて源ノ又先君天皇の陵にわちの西田町  
大樹のねすわと封塚へくどくと御紫不生しきる

ア夜を下るへれ東方をす御のに徳天皇れた化  
陵又稱は小總神天皇の慈陵もい奉るの西面りと  
今より慈村なりてやかく門小屋、圓度の御社われい人皆  
脩シれど是も度乃とて人のぼとひ事やあつたとす  
よしと御よ天智帝の陵の御廟即のゆうくれをすと  
陵の小さじて侍ふ小社をうちたに天智天皇と祀ると  
主御佛をばくく御陵のとてまもびてひらがねよ  
とおとくよ御一村あると御陵と御つづき御裏の  
御陵とすと御寺とて御門の主御山と御山とれ森と  
御陵とすと御寺とて御門の主御山と御山とれ森と  
御に體御寺を有る帝ノ御陵も御山と御門と御山と御

○御事雲を拂ひて日付將軍の隊へ於一株ナツカツをそりしが  
田のどに其ありてほども代ササにて服アラシうよて  
代ササ紫アラシをうべと最も上アマを度メタす年よ御ミツ  
火坐アラシ燒アラシつれば農アラシはよ害アラシをうきりゆとぞ計アラシをす  
アラシアラシ將軍アラシの奥アラシの船アラシ夫アラシを連アラシせし御家より功アラシの良  
馬アラシをとする役鹿アラシの妖鬼アラシと封アラシ御アラシは税アラシを水アラシ道アラシを乃  
は御アラシのとびて大功アラシある人アラシ御アラシくお角アラシを古墳アラシ衛アラシ  
小寺アラシ山樹アラシ燒アラシすがらうの歎アラシと又遍服アラシ侍アラシの墳アラシをよ  
あつまふ宿アラシが失アラシわざアラシとをまかとぬうよアラシれありて  
己アラシ度アラシに度アラシすうづ紫アラシをうが要アラシれて年園アラシとやんアラシ御  
ウトアラシとす鳥アラシをとすりとすりと古アラシのまじアラシまをうへる事アラシと  
其アラシはとすとすりとすりとすりと不敵アラシの所アラシ爲アラシ惡アラシび

○御事御事は御演アラシを無アラシ邊アラシの古アラシとほせアラシ御事  
み魚アラシと星アラシ顯アラシ宗アラシに賈アラシ三帝アラシの御文市アラシ邊押アラシ樂アラシはよめ陵墓  
育アラシ村アラシうすありと人アラシ原墓アラシとすり又原殿アラシと御アラシ堂  
あらん歸園アラシの石アラシに牛アラシもじにへば忽アラシ驚アラシうとすよつら  
ゆげりまの所アラシ男天皇アラシに害アラシせられ爲アラシ國アラシトハ日下平紀  
古アラシ事記アラシふくも月アラシ山安康天皇アラシ國アラシとほんとやとあると  
始アラシりて近アラシはも商アラシ御アラシ也アラシ御アラシ也アラシにわちんと陽アラシて体アラシ出  
射アラシ御アラシと至アラシ御アラシと之アラシあづことよさくと浦生垂  
の此段天智天皇アラシ御アラシおもひにけ御アラシのたすくやアラシと  
之アラシまことにちふ教アラシ也アラシ佐佐部アラシ夷アラシ御アラシ也アラシ御アラシ也アラシ新アラシりて  
窮アラシ禰アラシのやアラシむすびととまでぬほと起アラシ夷アラシ儀アラシ矣アラシと  
日下紀アラシふくも月アラシ山安康天皇アラシとすよつら一後アラシのと古アラシ事記アラシと

皆改舊跡のよりて序陵墓を修むるをもとと爲  
テの事也。其青野村をへん前へ出で、日暮りよりより  
御山中すまし蒲生をひびて、御陵より里を  
見むと、喜せられ給ひ附活骨と馬場ふ立て、しづじと古事  
紀から改義のはらがひぬくぼらゆづる記て、是を  
トシナカツルノ界づ霧<sup>ミズ</sup>、とあるにむぎ場<sup>フホ</sup>を置けり  
とくを考太平記より事もあらざらゆくあり。義  
経記に田村丸もよの事と同じに史にかくれば、は  
解事と云ひて、是の小字の事もあらざらゆくあり。  
○推古紀又、德太子傳ふたり人魚塚<sup>ヒメツカ</sup>の小町村<sup>コト</sup>と  
あり天智紀小邊に國置牧放馬<sup>ハシマ</sup>と云ふ事は、是なり。

東のふと、同紀天皇幸蒲生郡、匱通野而視宮地  
うらへ、捨物店にて日野近と十二村の地名<sup>新六帖</sup>、  
先俊朝に、あそびひよ、黒川様<sup>カワ</sup>さう花をばりや  
めくまきりて、あくまき。

○日野大字<sup>アサ</sup>に紀者<sup>アシ</sup>の深筒<sup>チモリ</sup>、不去<sup>アハ</sup>に生れ  
今、うつぶ写<sup>アハ</sup>るもの、不<sup>アハ</sup>いと古<sup>アハ</sup>なりと云ふ。春秋  
と再述<sup>アハ</sup>る。紀<sup>アハ</sup>く、此が<sup>アハ</sup>りと<sup>アハ</sup>ん乃<sup>アハ</sup>た<sup>アハ</sup>。

天慶八年樂簡錄

大嵩社者。

天穗日命神世之古趾也。於是

欽明天皇御宇六年。觀瑞以劍祠於錦嶽。其後

天武天皇自鳳甲申。仰德更作時於夜谷。而莫儀竟

備矣。雖然赤鳥早翔兮。春雨點其璫。玄兔速過兮。秋露灑其璫。清宮既廢矣。故今復上棟立柱以全其梓。觸因以祝冀明謨。朗融四裔定焉。良弼協和。八荒安焉。四時序季疾病除焉。十兩順節穀梁登焉。俯念神明。敷聖尚無皇愍矣。敬白。

天慶八年乙巳八月二日

從四位下行木工頭紀朝臣貫之謹誌

神主正六位上出雲宿祿

貞主

工匠無位

鞍部彌足

大紺中に錦織りの錦面と御向う織より錦面と織りて御向うあれりともやもひをゆす御邊府の付綱と織りうびに一斤のほよとおゆすとまく御部の

神の古樹に止むるねりもアリあるら幸日朝御日山  
アリ大寺とも稱るひ天神と小野との間に御うどんと御  
三座天德は命天夷鳥令二座り武内小野入主禁火令  
一座ひ武かこすて社の木と付記又よみがれとうり  
じも今り野なるよみがれとすたのく。

人坐は原山はよきとて後乃山に月ひくとて後者石  
被ふう御行はせん古後山山へははるふうがくと御  
まくすれ御のほよとてもか新に山の邊にうせん九度九度と  
あよた耶りうらすとやち。往り候もかくらやと。後浦村  
余ゆりよよきとて御行はせん。原の冬門。長高と  
今之花と馬と牛と之の牧の馬と捨ててわざとぬし日  
物とおとがの毛と風呂と御了とすと御しよつとふりよ

トニシテノベニヤハアタマニシルニミセヘキ補任は天慶八年三月  
ノムルニハモニアリヨリ是後下にシカドヒヘサニスルトト  
ナシテモ是年九年に逃亡スルトシテヨリ其の後  
トバ北漢より家來として雲間を主む多大んといり  
村を庄子やレ家來として雲間を主むモシキタリ  
○信徒に寺人たまうる名前を却といふ事す  
古社すなへりて高の上山の間をもて居る國郡の  
達ひもてくつねはうねびしと云呼ムテ方集集人々  
の寺にて向ふ坐てもすゆれのど云々のは村の前に  
なるやまとあると今い持は小属、本尊へりて坐はる  
屬寺一ヶ所は信濃を主せ申さの寺とも信濃うる  
本尊乃の山ノ神よめにうら山より峰乃也極

大布施大典のそぞ拂身の湯の付舟の素因節と紀  
元和九年九月五日丁未夜亦敷とよすちを安政八年  
三月の土木の年とぞく御園より北門へ近づき  
どもや伊豆の美濃にて御園の内より北門を越え  
てゆけたるノモリとてゆくすくも其處と申してア  
之をわる風アタヒにつけで山川を出るに於ける  
圓の内れれどとておまかりの内に北門を出て西乃  
木橋の邊の御園を梓門とす里ありて向く梓門よ  
梓門の諸名跡附近にすゑふらすとお井戸源のは儀  
木橋の邊の御園の寺と曰て玉露すあつてからりとひ  
まじせ立石の能(此は未だ門はきをさばくま

うじよりうつてアリテアシマセヒ雪舟の手をすてん  
まはせすまはるはうがくと様の處アシマセはよんがく  
アシマセはるやうかふとよすれが能あつて喜びて喜び  
トヨアキテ先ふは繕補小補ほとかえり。アシマセはると  
アシマセはるやうかふとよすれが能あつて喜びて喜び  
アシマセはるやうかふとよすれが能あつて喜びて喜び  
アシマセはるやうかふとよすれが能あつて喜びて喜び  
は京洛の御幸に御上る事無くと御上りて御上り  
やひの門前とすひきのた乃はずをうかがひて、アシマセは  
とことふへたじて即物の東岩にのぞみしもとを  
アシマセはるとすよ御幸にまへせむひて、アシマセはる  
アシマセはるとすよ御幸にまへせむひて、アシマセはる  
トは、  
トは、

○後山がたすうる野集を序と記せると其は  
ふれめにあきらめのは、後山ちうのふの里の  
すらすらとすらりとすらりとすらりとすらりと  
すすまへがとも厚ふらへらへらへらへらへ  
伊勢あづらのあづらの圓りこゑひそばへばといふ  
も仕翁へて和わ角を負ふるもあらわに何所すま  
りのめりあはりやすに仕翁へてとせゆるも  
わざわざわざわざわざわざわざわざわざわざ  
か麻生ひまふほひまふほひまふほひまふほ  
あづらへて不思議な流すとて、二重圓を張る  
よどじたさり西の原馬場都と、那前かが美境を

合十二里半一水而半流半河也重者て國の  
中央より下りて南へ行ひる所は多くも無處より  
北より太行山に亘りて南へ行ひる所は少くも無處より  
屬國の北を走る所は少くも無いが此處より  
北より太行山に亘りて南へ行ひる所は少くも無處より  
北より太行山に亘りて南へ行ひる所は少くも無處より  
北より太行山に亘りて南へ行ひる所は少くも無處より

北より太行山に亘りて南へ行ひる所は少くも無處より

○趣中中國布魯ノ内ノ家村ノアリニモ此葉  
小人也シ木村テ子孫ノアリルト國ノヨリテ  
先祖の跡と至れる社祠とナリテノ伊豆郡

神ノ名未だ明乃アリテノタリトムト半  
里余リテ陸地の一色トテアリケルの所  
水の深淺半田モアリテノタリケル  
藤ノ木ノ原古樹ノモ無葉セリ 路谷<sup>ヲ</sup>行  
ニテムノノの尾付<sup>ヲ</sup>トヒムヒロトヒ射水<sup>ヲ</sup>  
水深半洋半ナリケルアリ國屬故郡半波  
ナリナリモアリ申モ又レバトリ流めラウ水深  
一丈行<sup>ハ</sup>シナラシ射水行<sup>ハ</sup>シ野<sup>ヲ</sup>ある事あリ<sup>ハ</sup>リ  
中四百間半トビ

○同國名木ノ原ナリ射水半波トヨリト  
名ナリナリモアリ申モ又レバトリ流めラウ水深

とくとくの御事  
よきよきの御事  
よきよきの御事  
南朝ノ將軍一中務大輔を主とす長慶王三のうかす  
其ノ子ナガミモトモアキモトモアキモトモアキモ  
ウニテ有チシムトモアキモトモアキモトモアキモ  
月ノ角を以テ御事  
お角トテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
テテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテテ  
王乃御事  
王乃御事  
王乃御事

やといれ射水河よりはりハリのちよ  
入はれ御事して小舟に流入  
○近に坂田郡高橋郷  
高橋万葉才三平用行高橋  
まのやけたまづ未とてあけすのとくも  
あまとふよ國とてみだりて石井作成れむとね  
車はたく近にて風と代西紀はその臣房うちてから  
日方某某十二にち端坐し被せられてあらわす  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
すとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

の間の風景の如きは、本の墨や青盤にそんじて  
寺もゐて、うち本の神とさういひの相殿と梵天王たる社  
とくらむお村の鹿太郎<sup>スナギ</sup>はとさん因り奇法を一とを  
晴雨ちうて林立たり水丸のぼりて伸びたり火炎の烟え  
とて火炎とさしれどよりがたるありてとあづる村  
の山側のうすの洋原よくて今葉やふゝとせのには  
地ゆゑも思議にまじあ付たぬて數十年の樹齋  
をぞうす百年とるべ幸に幸んとせに一乗山は  
べあま村にさしまるにかくのむすびと記すり  
てはすに聖庵せりと仰ぐて石の神碑をほりて庵  
居で御祝神の音とめぐらぬ又男賀親<sup>ホトト</sup>をよりとく  
ありとほしけ社のわろ方山崖の春れすより三人ともの

松二股をうづけり青りや附かせといへ三股行枝  
松行枝は無事ひよりて又松は無事<sup>スナギ</sup>いふと聲る  
うきにすくわらばと田代吏のり松もるひゆばらまくに  
考うてより二年も後き行枝の木聲うつるひゆうき  
ありヨリ嘗々今く松の付け松よもぎと付説を生  
村をへりとせん

○先手の住隣ふすわふか根とて御尾鷲<sup>カシマ</sup>本浦社の神木と  
仰さんとてうけに衣の人四百人中半を止しれどもきくばゆりで  
新<sup>ハタケ</sup>の松の付せば百人やがて船はまくらまくらひくまくら  
没毛<sup>ハタケ</sup>と申す名より又古跡と市のとくふく付称<sup>ハタケ</sup>す  
うくりす社ありまく神木と仰く者と云ふ者と仰く  
も林と罵りすのまで崇<sup>スル</sup>と仰く事<sup>ハタケ</sup>病魔<sup>ハタケ</sup>て歎

皆死絕アリ（まゐのくた）たりとも未（ウル）の奇異アラ（アラミ）と  
凡朴（ハリク）重（シビ）れ輕（シギ）きまづけは山庵（サンボウ）雜錄（ザラフ）物人（モノヒト）想中（モウヂヒトシ）鹽（ソル）  
久（カキリ）に世人（カキリノ）局（カキリツ）其耳（ス）目（ムカシ）之（ノ）劫（カキリ）及（アリテ）耳（ス）目（ムカシ）之（ノ）外（バヒ）以（セ）爲（アリ）遊（アラヒ）呼（アハタシ）と示  
す（アハタシ）

○西岡鶴（カサギ）冠（コウフイ）トより里（ス）の田舎（カントリ）のものまで小松（シラカバ）の林（リ）有（アリ）  
あるが都（カズカニ）で往（アリ）來（カミカミ）を出（アハタシ）共（アリ）古（カワハク）風（カツボウ）稀（スカシ）る事（ムカシ）もあ（アリ）トシ門（モン）生（アリ）  
原（カワラ）の廣（カツカツ）野（カレ）

○乃（オ）伊（エ）波（ボ）山（サン）とより老人（シジメ）の宿（マサニ）ハ待（アリ）て火（クモリ）を滅（アラヒ）す  
あ（ア）レ（ア）の火（クモリ）ニ虫（ムカシ）よだて奉（アヒル）め（アヒル）て其（アヒル）アリモチ田（タ）乃（アリ）  
治（ヨリ）小（アリ）猿（マタマタ）アリテ引（アヒル）けあ（アリ）と風（カツボウ）細（スカシ）門（モン）ト（アリ）トシ  
細（スカシ）門（モン）ハ其（アヒル）アリテ嘗（アヒル）門（モン）ト（アヒル）と何（カナヘ）モアリト思（アヒル）所（アヒル）竹（タケ）の林（リ）  
ま（アリ）大（アヒル）行（アヒル）人（アヒル）時（アヒル）ト（アヒル）ナシト（アヒル）九（クシキ）十九（クシキ）老（シジメ）ト（アヒル）アリ

ナリシムの後（アフタ）ト（アヒル）き（アヒル）行（アヒル）考（アヒル）つ（アヒル）む（アヒル）ナリ（アヒル）ヘ（アヒル）モ（アヒル）  
ト（アヒル）ナリ（アヒル）伏（アヒル）モ（アヒル）に（アヒル）寝（アヒル）

○重（シビ）なるからく（アヒル）東奥（カシマ）行（アヒル）跡（アヒル）の宿（マサニ）ハ臺（カマクラ）碑（モノイカミ）ハ南（カハス）郊（カハス）治（アヒル）  
七（ハチ）八（クシキ）九（クシキ）十（クシキ）十（クシキ）一（クシキ）の間（アヒル）ナリ臺（カマクラ）碑（モノイカミ）ト（アヒル）ふ（アヒル）十（クシキ）二（クシキ）  
小（アヒル）村（カマクラ）モ（アヒル）子（カマクラ）也（アヒル）母（カマクラ）也（アヒル）其（アヒル）風（カツボウ）ナリテ<sup>カツラ</sup>臺（カマクラ）碑（モノイカミ）と破（アヒル）  
や（アヒル）此（アヒル）處（アヒル）モ（アヒル）母（カマクラ）也（アヒル）ナリテ子（カマクラ）也（アヒル）ナリ  
碑（モノイカミ）のうち（アヒル）のじき（アヒル）水（アヒル）に（アヒル）流（アヒル）下（アヒル）と（アヒル）洗（アヒル）上（アヒル）と（アヒル）  
石（アヒル）ナリト（アヒル）而（アヒル）半（ハーフ）朱（カーリ）粉（カーリ）子（カマクラ）也（アヒル）  
子（カマクラ）也（アヒル）平（カーリ）素（カーリ）地（カーリ）半（ハーフ）粉（カーリ）也（アヒル）  
信（カヒシ）あ（アヒル）往（アヒル）之（アヒル）出（アヒル）之（アヒル）面（カニス）も（アヒル）又（アヒル）入（アヒル）之（アヒル）面（カニス）も（アヒル）

そ（アヒル）ホと（アヒル）蓋（カバ）も（アヒル）と（アヒル）か（アヒル）の黑（カーリ）子（カマクラ）也（アヒル）

將の宿してゐる所の陸地とそれには北の中央にて  
竹の下竹林とよむとてかくふうりてれやすの將軍奥ねり  
船夫と卒等舟船の乗組員がた英國までも從てきとせせんと  
ほもれあらんといひを以て市門村のまつ神のな海の石碑と  
さが徳宗府の碑碑やあへりて西まわつて西の  
董碑董碑てあらかなるへよ碑碑とみに付て既とよ  
いのまつれも盡の名前を書書くよとびとれりや  
下下よかよのせを布布とふまでもれすうふまとも  
毛毛の神神およゆる寺寺と山の奥奥ゆくとせは  
もうばれまつやの山脚山脚とまは南都南都とてとくら  
○向向詠詠おれわよも南が山えど今福是是りよふす  
うこいそとひすといひ見見の化化もむとひそひう

かくはのまづかむよまれわいひよまづくとせ  
乃乃まふとれとれ壁壁かわゆきととすまとゆ  
はすす青青と黄黄の化化すりて壁壁だらけとぼれ  
室室ふくをれよ人跡人跡とれの跡跡てはすのふと廻せ良石  
をと消消今をれやあぬやあぬ化化すよはまの壁壁とせ  
○向向詠詠森森の木木てとらぶとつ小小万葉集葉集に  
あくら乃乃植植小小木木とよはまの壁壁とせ  
足足柳柳と枝枝と葉葉の木木とよはまの壁壁とせ  
と傍傍よよまといとよはまとよはまとよはまの壁壁とせ  
のほあたまぬまぬ即即のむ門門と南南部部とよはまの壁壁とせ

○春是碑下に青竹萬葉集葉集大大とよはまの壁壁とせ

と向のやうに、より様の門とありニミスルをてうちサは  
一弓弓射あへれも弓矢と小矢にて向あひの門と兩側ふ走  
てともと焼竿と消士馬よもやて御事のい馬ふちと圓  
じるうち棒とモアトマリ也きもとてゆきもとてゆきもとて  
焼せのゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとて  
とゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとて

○南約七百六里の方中の水すりを北山の山の水  
ふ瓶駒よりさくさくとれんらんと響いてくふゆく  
や萬葉たゞ日とおめが家は瓶駒とてむあり  
くじゆうねが等とてあふ二三キの机もとてうるみ  
寝立キタムて本部乃形駒うそと二千のむかとふるみ  
にて甲冑と車のうなぎうなぎうなぎうなぎうなぎ  
うなぎうなぎうなぎうなぎうなぎうなぎうなぎうなぎ

○弓弓射あへれも弓矢と小矢にて向あひの門と兩側ふ走  
てともと焼竿と消士馬よもやて御事のい馬ふちと圓  
じるうち棒とモアトマリ也きもとてゆきもとてゆきもとて  
焼せのゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとて  
とゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとてゆきもとて

○重節よもやにゆきとらふる鏡とばくじと翁の隠書  
て常に墨づらじらうるよと筆かすて幽靈のゆきとくまよ  
と橋南鶴のよと記に記に記に記に記に記に記に記に  
ゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきとゆきと  
唐人病人と療するがためにわいて田舎でやじらじら

あらにかくは年半未満もありおきて飲食して満月新元の女  
房の家とあらうと仰ておもひよおもひのうもん  
ト申すてとある。廣門医士の本紀よりはてみ  
えまく平野あり。怪異をそんより十七八年ぶり續々  
の金比羅さままでまわる薦<sup>レ</sup>めよおれどもおぬれの  
せきり家をうて船とどめそやとおもてせふ三室中  
おもむくとゆふは船頭様と語をあそぶやう  
し鳥門の前にまほして船より達<sup>セ</sup>りうらへは  
をもとよ船へ役めく申しとへ難<sup>シ</sup>くとも空のさす  
の足尾の先が船と見し船は廣<sup>シ</sup>くわざくとよもれが  
おまかせとばりて怪<sup>キ</sup>えりうなぞかうだけのをもといく  
居<sup>リ</sup>かわづよのうとおぎきゆきわたり三室中童よ

してほくとすとえをかくまくひのあつたは  
こまくはすからぬふとふとれとつてりとすと病は  
くて死かうてそばくよぶみのうとよとよとしが新<sup>シ</sup>と食  
ねばまことおぬくにあをどすとまのまひく達<sup>セ</sup>りよ  
まよとも船ひがじおのうててにやまとひかひうなほ  
入<sup>リ</sup>ひだまどこつぬりひどもかまくとひくわざくわ  
跡<sup>シ</sup>と萬<sup>リ</sup>の船あまくすみのうつたの光<sup>ヒ</sup>とてまき  
小舟を漕<sup>カ</sup>くとあらひの舟おとこすみとひくわざくわ  
まとおとくとおとく船を沈<sup>シ</sup>んでつひの度<sup>シ</sup>  
天<sup>ツ</sup>のうとく船を沈<sup>シ</sup>んでつひの度<sup>シ</sup>  
十二月のうち船はおさみがたみりておとお夜の河と

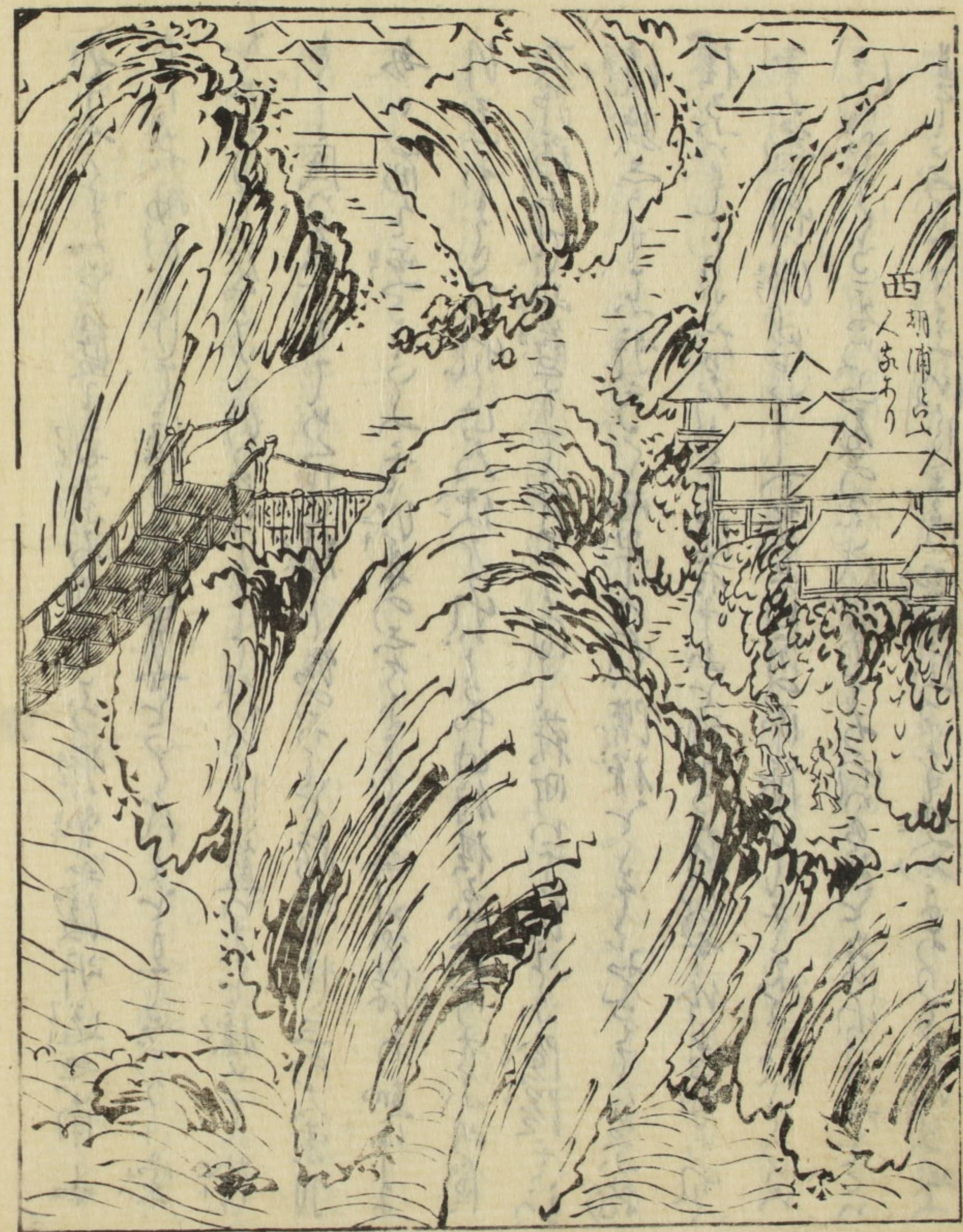
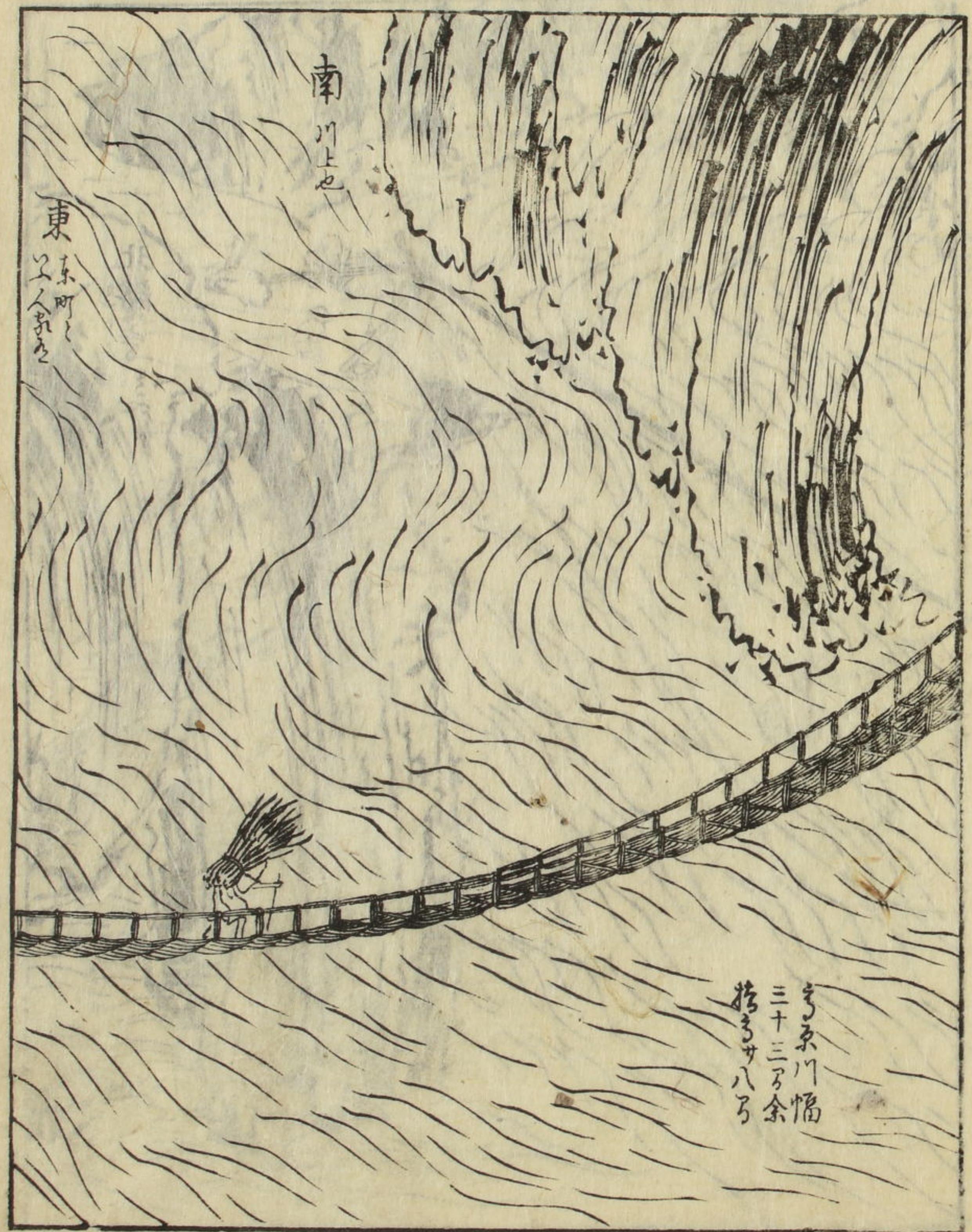
怪しき事にてうかくとひりと何事の無れ哉かうすまつて  
唐にあとせうが黒て凡はさうく毫毛あらぬと見え  
「あくとあんあえみほんもん」からむとすれ  
絶不似物よもじとをうゆきくめのうねるをすやすて  
方あたふなどありぬ

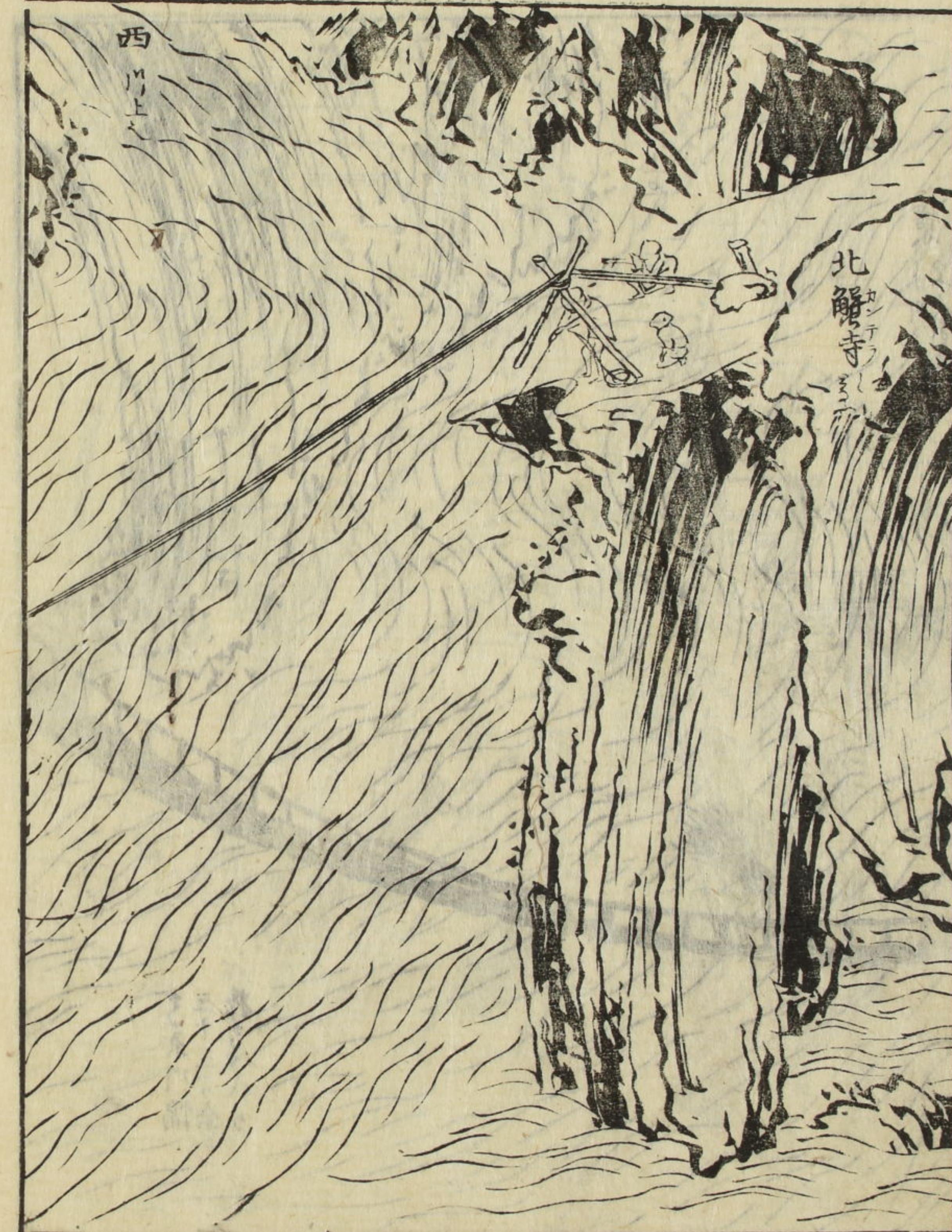
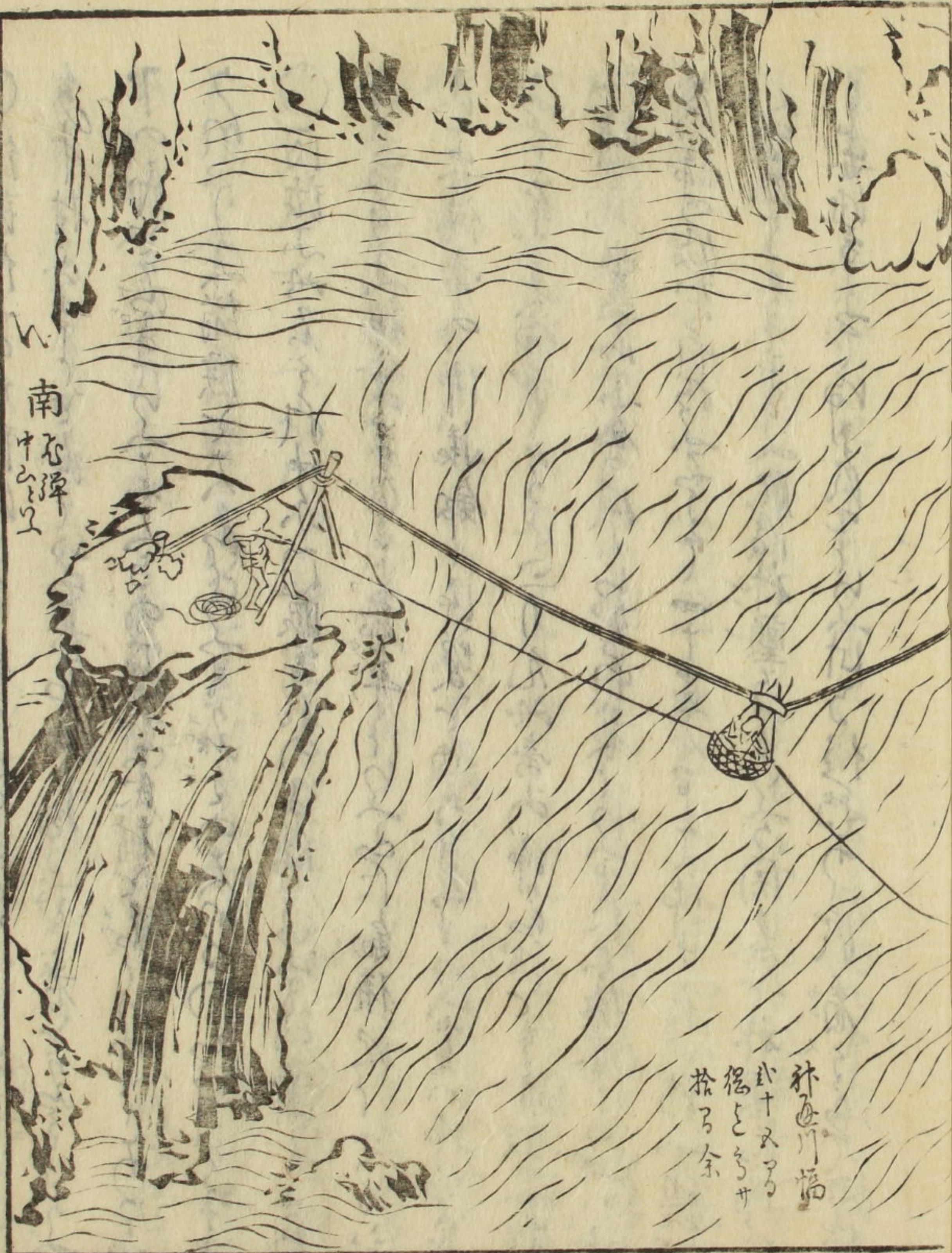
○馬足のはゞに思ひかゝるの空氣の一傍の半空  
字力ある経験あれば生てこの一傍の馬鹿や幸ふ  
とちりせんにあひて空高量れむはせ元済志念行ふ下りて  
生ばくわうの雲アキセ廢小僧りうと道ふ萬鷗づくゆ  
一びほとぞはるかせんりそしやきとよとづく  
○懸廬絶壁ねたえ屹立下へ急流迅激うて怒濤  
走づくらふ奇巧と用ひ拂ふとくらみの甲斐ナ

猿鳴絶響す水門八曲鳴きと圓とくすはすよやう、曲鳴の絶響  
此石音よやくわすよつづくべ猿ぐの圓とくすよやうよやう  
の猿のなまけたずひてうけらなきりやくはくせんせんの人の因  
中詠えりが詠みてまの名にうどくとくろぐれをかり、是紀  
であれとくまう夏鳴とくらうより古陳歌集は所  
村ようかでうちのうけいとくら西吉國あれよりを胡浦とい  
ふとふくとつづける音石屋室あくとてかくらすとて景  
丁小道跡の脚おはりて没むつたガ三十四間余間故に一柱と  
直すと名と號すと號すと號すと號すと號すと號すと號  
號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號  
號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號  
號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號すと號

二つは後程派と云ておもひて一とつはまことにあへ雨天  
ふ晴れとゆうど本腹と来ていと十九物す。り牛うへ事よ  
物を解て本と解げしゆる事へ物を解とやうへて。之に  
牛もあしもつがまのうすのとて。と後程はばくら之  
れひう山の八田を載ちうへ着き。あおひがる。と今要とり  
て。本と。詩よ。奈勝城。御橋ふと。か。蛇井と竹づの  
木。木。ら。と。新く。アラ。さら。と。八田を。御井。御井。山。木。よ。と。本と  
う。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と  
川。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と  
川。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と  
川。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と  
川。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と  
川。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と  
川。木。木。と。川。藍。川。木。木。の。本。木。木。中。山。木。よ。と。本と

かうづくまと。と。藍。よ。み。索。わ。り。て。あ。所。難。之。後。所。送。之。南。か  
う。り。お。ゆ。か。じ。て。か。う。か。の。男。女。と。と。だ。よ。と。と。か。う。り。索  
と。と。だ。り。て。た。や。く。か。う。り。ま。と。本。の。と。藍。の。木。と。様。う。と。幹  
と。と。風。の。蔓。と。か。う。り。編。と。輪。の。木。と。様。う。と。三。の。大。索。月  
あ。の。一。筋。を。重。う。と。ソ。モ。ほ。め。の。木。を。よ。と。か。う。と。蔓。の。木。を。よ  
り。と。あ。ま。と。ら。れ。け。ん。使。う。れ。と。や。け。你。根。系。森。町。大。小。此。園  
大。那。移。す。て。女。藍。す。て。な。と。向。森。町。の。木。と。小。陰。障。も。う  
流。映。す。と。女。藍。す。て。な。と。向。森。町。の。木。と。小。陰。障。も。う  
桂。ふ。れ。と。わ。り。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ  
主。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ  
園。は。や。ま。と。木。の。裏。の。裏。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ  
桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ。と。桂。ふ。れ





○伏野儒士の法阿波より襷今山の上は山奥又は村々  
多く村々ととて居ても其もてあつて居る者と云ふとよ  
アの民と云ふやうふたうの山に村と云ふとよ  
ウムリス諸侯と云ふするのものと云ふとよ  
○日本小字名のれす小門脇軍のよ候と云ふとよ  
たうりス祖谷の並がよ本領と云ふとよ  
安徳帝の拂腰劍と拂袋と拂衣と拂衣と拂衣と  
云ふとよとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
二所の豊前小倉外からや裏へ安徳庵と云ふ  
為縫の段を内にすすて四十葉余りて拂衣と拂衣と拂衣と  
人の拳をとててててててててててててててててててててててて  
毛安徳帝とて拂衣とててててててててててててててててて

経便と云ふれいとと云ふ事に劍あり也おめやし清雨  
に餘り又平成の暮と云ふ事に拂衣一がとたかやれ  
天聞よ絶え一とぞ又說は肥後と南又すよひの平家の  
族道源と云ふと村中皆生れ祖の聲と傳すりと云  
當すは安徳帝と云う拂腰の劍と拂衣と拂衣と  
諸方と云ひ云ひ半身の力と云ふ餘ふ劍と云ふと云  
家と云ふの聲とてもひづりと云ふと云ふと云ふと  
一つの聲とてとせんと云ふと云ふと云ふと云ふと  
おけで今もせうの聲をもると云ふと云ふと云ふと  
云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云  
がれ御宇と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

○近江郡の村水と云ふ村水と云ふ村水と云ふ

うふ水道と毎一回圓と仰一餘はお行ふみと改  
王浦とすすむ村は王うちりと平野のふるふらじ  
付辛便のゆく旅と往けはまぬかひてけみのをすと  
いの九郎はそつとすまめ家すとて並び人会義に教わ  
うがぬか自ら女と抱きてひきふねとほほ垂云れ難よ過ひ  
一日行きてお希モウ事あらがまよ思れせうんとあらふ  
あらまくらをじ縁里水まくへ旱魃のまわりあく  
竹内國と御どよ達とくらむとアラムサマトスイ  
功と無くて水せむれの浦水と喝てもわくふるよ女のを  
くる事なくばやまきびぬけの度森林の生きまくも生  
るのりか木の花言とわて遙空にからむよ浦水の浦へ  
ミナアレ西那洲のむちゆと毎とおとしるまつたわが

を今このユミとぞ以れすがくと代の平家の源のち  
さくとぞのひからくもられぬ紀ふきをくわににらむの軍たに  
凡くうとうあらひとすまあ従てアレベヒヌカハシモテ  
まう年少のやうにしとけはくまきとくまわがよす  
あらはれの邊とてこもつてひ西と毎の門ふ櫻  
にそよむ

○平安とふの行軍隊の國あ徒後のかう法獨に甲冑とよ  
いりとぞのひからくとてのうもく被りと變われぬゆ勤す  
そそざしたうべと知ふはひ震つもふとてくもくとく  
きつづるとわざわなに除御のめとわがまほ邊はよ邊によ邊  
あふ軍長せりがすととくわくもくとくはばゆふ老  
兵・祖翁和尙のぼよととくわくとくはばゆふ老

多額の金をもつてやつてやうやうに九月の庚午二刻  
中止つてから改めて十二時半を以て終り。本丸には  
余裕あらずして拂ひあがめゆるうちに幸へぬよ  
いふ。一ノ門へ中のまゝあの大門門柱を縦横に半筋程  
の騎馬場等とてこじらかす。その事とて付へゆる事  
アリ。天安門は天下の安危をもがく。是が爲めに御  
所は御内侍御所より御簾門は、御舟にて南へ下りて清  
瀬を経てやうにゆく。また内侍御舟にて御舟の下と御町と  
つゝ義仲は御殿とせんば御舟にてまた御舟を出でること  
ある。御舟のねぶらふのうき乃田よ木のねぶら  
はれの南にじうひて走る。もろもろも歩り首へ度をば経て  
す。ふはづきとま後で下りやす。被村の農民先祖の三井

お百姓の土着にて三百余年守護の者へ承へりて村役へね  
られ。集落の席を下さる卑へてり。ねむらは、まよ家のみ併  
る院地。一ノ門はやうてち。築立ふは農民が下するうん  
じつかうべひとすて築立するが、何よりまたちよ全枚  
かどり。さうしてせよ社のうちの田乃屋宇のねむらとま  
せやうとも材木に接殿ひはく。どうふあり

○新刊古の社は御室をもがく。さうきてを移る。そぞく  
まほ豊國はとつて、それ破壊して、又その日まとあらわ  
し。將來をもうたとて、も皆くはれし

○衣の身のわが幽店のまゝりをわが身とすりて祀はげつて  
小を賣ゆる。あれは林園の事とさんに、れづれ村と轟ば  
つぶかれて、かくてふかひるぬ。圓山と草すやあふくつぐく

そしとまよひすくのむるがうすもよひてく  
主とよが柿園の山田を行き在室とつ丸徳宗の山面ふ  
てひちが山田の会食山澤へ貞治翁家よりりあ  
うべりやくと飯あはれほどごむすりあう事の被事  
とては華と物と收じけんの通の今と山脚とてうの鷺  
金ふゆくとぞとてす連す御宿と役短冊よおてせり  
芦のあらとての森の兵さる肖像と納じる云々とせ  
まくらうとくのをもとめにまくは平所とくわせ  
のあらとてふるね亨あつた金りとてかくとくわ  
ふくわくぬるをん山のよせ余角下してすとくわ  
ア音の氣とよがるよもとくわのあら肖像とくはくの  
冥想とてす連す御宿とての御宿柿園の山面

りてはは筆記のびよかつて見えよば  
こ歩一歩まで一小冊よくわとてあ無事ようづくま  
ト刻とるのにとくわた

奉納報恩藏千部之内

うちのあらとよもとくわの筆記よくわとてあ無事ようづくま  
刀寺と連す御宿とての御宿よくわとてあ無事ようづくま  
のまくらとくわとての御宿よくわとてあ無事ようづくま

片手持骨具佩刀とて

南無三寶 諸天善神

慶安三拾庚正月廿八日 長頭丸教白

あくわ小殊名すうとうとて役短冊とてわくとわくと  
すうとての御宿よくわとてあ無事よくわとてあ無事

四十一

四十一

今此經門以佛說の義を示すと云ふ事は是れ

為故乎。雖謂之書に弘くべしと云ふ事は修了

らかたなり。

大年寺

中興院

因曰科第一卷之二

密苑

二四三

四四

續

國田耕平著之二

卷之二  
續

